

## 研究ノート

## 田中丸善蔵（玉屋創業二代）と南洋群島進出

——田中丸善蔵と金津熊夫の日邦丸ヤルート来航を中心に——

山 崎 功

## 日邦丸ヤルート来航

大正三年一〇月、第一次大戦のさなかの南太平洋に向けて横浜埠頭から汽船日邦丸が盛大な見送りを受けて出航した。出港当時はインド洋、太平洋にドイツの巡洋艦エムデンが出没、翌一月にオーストラリア巡洋艦に

撃破されるまで、ペナンでロシア巡洋艦一隻が、また二六隻に及ぶ商船が撃沈拿捕されており、まさに命懸けの壮挙であった。同船には、玉屋創業二代田中丸善蔵、海軍予備中佐田中行尚、佐藤適、金津熊夫ら数十名が乗船している。その目的は、南洋の経済状態の視察とドイツ海軍の通商破壊により途絶した南洋群島占領地への補給にあったという。当時南洋群島と他との交通は途絶し、食料や日用品が欠乏、戦時のため「行政上ノ必要ニ依リ一切他トノ交通ヲ禁止」された在住外国人への物資補給が国際関係上からも人道上からも喫緊の課題となっていたのである。財閥系海運会社が生り込みするなか、田中丸善蔵はいずれも佐賀出身の大隈重信、藤山雷太らにわたりをつけ、南洋群島への日邦丸派遣の計画を実現させた。彼らは善蔵の九州人らしい剛腹さに感じて、期待と信頼をよせたと『牛津町史』は記している。出航に際し埠頭に集まった随行者や水夫のなかには、「田中丸」という船を探しまわったというエピソードも、当時の善蔵の存在の

大きさを示している。<sup>(1)</sup> また、「かねて（田中丸・引用者）氏の俠気を知る」秋山真之海軍軍令部長は田中丸善蔵を呼び、南洋艦隊司令官松村中将と八代海軍大臣は彼に「日本海軍面目のために奮起せん事を促した」という。<sup>(2)</sup>

翌一月、ヤルート島駐屯の第五特別陸戦隊指揮官・ヤルート守備隊長立川常次少佐は、田中丸らのヤルート島来訪を次のように記している。<sup>(3)</sup>

大正三年一月一九日午前一〇時、「西方遙ニ黒煙ヲ見ル・・田中丸商會汽船日邦丸ナリ・・午後六時一〇分日邦丸ヤボール錨地ニ入港」。

ヤルート島はマーシャル諸島のヤルート環礁にあり、ドイツ領時代にはポナペ政庁の支庁がおかれた。さらに、島内のヤボールは安全な錨地として棧橋や軽便鉄道が整備され、ドイツのヤルート会社、英国系バーンズ・フリリップ社の支店・倉庫が開設されている。ヤルートは燐鉱、コブラなどマーシャル諸島経営の中心として、重要な拠点であった。一八八五年ドイツの南洋群島領有を受け、ヤルート会社が創立、同社は徴税権をはじめヤルートのみならずマーシャル諸島行政の実権を握ってきたが、マーシャル諸島の門戸開放を求める英国系企業バーンズ・フリリップ社との紛争を経てヤルート会社の特権が失われ、一九〇六年以降ニューギニア総督の直轄地としてヤルートに支庁がおかれることになった。だがその後もヤルート会社はヤルート支庁やドイツ海軍との特別な関係を維持し、ドイツ政府との間にシドニー、マーシャル、カロリン、香港を結ぶ郵船契約を結び、

ドイツ海軍のための貯炭などを担う国策会社としてバーンズ・フィリップ社と激しい競争を続けてきた。<sup>(4)</sup>

こうした中、大正三年八月二三日、日本はドイツに対して宣戦を布告、日本海軍は佐世保を出て青島のドイツ拠点に向け出航する。九月一日には海軍第一南遣支隊が横須賀を出港、九月二九日にヤルトに到着・一時占領を経て一〇月三日、正式の占領命令を受けてヤルト島が日本海軍占領下におかれることになる。<sup>(5)</sup> 山屋第一南遣支隊司令官は軍令部宛次の電報を送信している。

枝隊ハ上命ニ基キ今十月三日「マーシャル」群島首廳所在地「ヤルト」ニ聯合陸戦隊ヲ揚陸シタル所何等抵抗ナク此ヲ占領セリ又「マーシャル」群島ハ事實帝國軍ノ權力内ニ帰シタルヲ以テ同群島ヲ占領シタル旨本職ノ名ニ於テ全島ニ布告セリ<sup>(6)</sup>

ヤルトには第五特別陸戦隊が守備隊として配備され、指揮官は立川常次少佐であった。<sup>(7)</sup>

一月九日の日邦丸入港後、佐藤適と店員野田金一が来庁し、その来航目的を「ヤルト島ニ事務所を設置シ、マーシャル群島ノ貿易ニ従事」することにあると説明している。日邦丸の積荷は、南京米、麦粉、麦酒、酒類缶詰類や雑貨などであった。翌々日の二一日、田中丸善蔵が来庁、海軍軍政下のヤルト守備隊指揮官は田中丸商会事務所設置を許可している。その際、善蔵は現地での視察の足として商用スクーターを買い取ろうとしたが、うまくいかなかったようである。また、ドイツ海軍の恐怖と背中合わせの日邦丸の過酷な航海は同船火夫長を脚気で失うことになり、二二日

の埋葬式には陸戦隊附軍医官長田中軍医、指揮官附小林中尉が参列している。葬儀の翌日の十一月二三日午後四時、田中丸善蔵らを乗せて日邦丸はエボンに向け出港した。善蔵は「代理人野田金一以下店員四名ヲ残シ貸下地ニ事務所設置ニ着手」した。<sup>(8)</sup>

### 田中丸代理人 金津熊夫のエボン方面視察

日邦丸がヤルトを出港して一週間後の十一月三〇日午前五時四五分、帆船「ヤンセンロキゼン」がヤルトに入港する。同船は、田中丸商会がアイリングラップラップで備船したものであった。立川ヤルト守備隊長はその様子を次のように記している。

全船ハ「アイリングラップラップ」ニ居住スル「ラリック」大酋長「レート」ノ所有ニシテ日邦丸全地寄港ノ際凡四百「マーク」ニテ借入レタルモノニシテ噸数四十五噸田中丸商會代理人金津熊夫外一名乗組来島セシモノナリ

田中丸善蔵は日邦丸でヤルト出航後エボンなどを経て帰国の途につき、以後善蔵の代理人として金津熊夫がエボン、ナモリク、アイリングラップラップとヤルトを結ぶ新たな商機を探ることになったと思われる。一二月二日には金津を乗せた田中丸備船「ヤンセンロキゼン」がエボンに向け出港している。<sup>(9)</sup>

ヤルト島に残留した田中丸商会の六名は一月三〇日木造トタン葺板小屋と倉庫の建設を終え、翌日から商品販売を開始した。ヤルトでの田

中丸商会の動静を守備隊長立川少佐は次のように好意的に海軍軍令部に報告している。「其ノ賣価低廉ナルヲ以テ極メテ好況ヲ呈シ本日迄ニ於テ雜貨類ハ全部ヲ賣尽シ目下少量ノ米穀ヲ餘スノミ」<sup>⑩</sup>。

一方、一二月二日エボンに向け出港した金津熊夫は、エボン、ナモリツク、ナモ、アイリングラップラップを経て一二月二八日コプラ三五トンを満載してヤルトに帰港する。金津は、ヤルト守備隊長に次のようにその成果を報告している。

アイリングラップラップニ在ル酋長「レート」ニ非常ナル歡迎ヲ受ケ且ツエボンニ在住ノ全酋長ノ弟「リトクワ」ニ對スル紹介状ヲ、レートヨリ得テ同所ニ於テモ同様ノ歡迎ヲ受ケ其ノ他至ル處土人ハ皆好意ヲ以テ迎ヘタリト尚酋長レートハ商店トシテ自己所有ニ係ル洋風家屋ヲ貸與スヘキニ依リ是非、アイリンクラップラップニ於テ開店ヲ懇望セシト且、コプラ買集メニハ、ヤボール島ヨリ同島ノ方便宜多キヲ以テ一時本島ニテ開店セシ事務所ヲ閉チ倉庫ノミヲ残シ不日全地ニ移転スル豫定ナリト雖モ管理者其ノ他ノ關係上確實ナラス・・・又、ナモリツクハ完全ナル環礁ニシテ唯一ノボート通路スラ有セス且ツ礁内真珠貝夥シク繁殖シ居リ僅々二日間数人ニシテ貳千參百圓ヲ得タリ（貝ノ大サハ徑三寸乃至五寸ニシテ小ナルモノノミナルモ或ハ場所ニ據リテハ大ナルモノアルヘキ見込ナリ）又ビアカ島ニハ鼈甲及海白鳥（羽ハ婦人用ボンネットニ最モ適ス）多数アルヲ以テ不日該帆船ニテ同方面ニ向ヒ充分ノ調査ヲナスヘシト云フ<sup>⑪</sup>。

## 南洋企業合同の示唆と分れる田中丸評価

アイリングラップラップ住民らによる田中丸商会の歡迎ぶり、きわめて有望な真珠産地としてのナモリツク、鼈甲、海白鳥（アホウドリのことか・筆者）の豊富なビアカ島など、わずか三週間ほどの間にこれだけの商機を見出すと共に、コプラ三五トンを買い付けてきた金津を、ヤルト守備隊長は高く評価したようである。ヤルト帰港の二八日当日には早くも金津熊夫は立川少佐宛「養殖真珠場貸下御願」をいち早く提出している。

こうして、大正三年一〇月守備隊ヤルト上陸以降二ヶ月足らずのうちに、旧ドイツ権益を継承すべく同島には南洋ビジネスのプロフェッショナルである南洋貿易株式会社のベテラン社員をはじめ、野心に燃えた多くの日本人がやってきた。

大正三年一二月三〇日南洋貿易株式会社所属の大進丸がヤルトに入港。同船には、カロリン、マリアナ方面で永年にわたる南洋貿易経験を有する原次郎が乗船していた。原はこれまでドイツ企業が独占してきたヤルトでの商機を探るべく、占領間もない同地の視察にやってきたようである。

「相當ノ商業家ト認め」られる原は、「本群島中 *Ratik chain* ニ属スル各島ハ既ニ田中丸善蔵ノ酋長レートト契約ノ存スルヲ以テ同船ハ田中丸善蔵代理人金津熊夫ト協議ノ上 *Ratik chain* ニ属スル *majuro* ニ向ケ大正四年一月七日出港同所ニ事務所ヲ設置セント」したという。

さらに大正四年一月二日南洋興業の備船金華山丸（船主金華山漁業株式会社）が入港する。同船にはニューギニアのラバウルに開店し、「相當経験

ヲ有スル」南洋興業の松本正純が乗船していた。<sup>12</sup>その目的は、コプラ輸出と南洋漁業経営の商機を探るものであり、そのため同船には和歌山県庁と和歌山県水産組合から派遣された和歌山県技手岡崎忠三郎が便乗していた。

なかでも立川守備隊長は海軍軍政下ヤルートの最高責任者として、これまでの実績豊富な南洋貿易、南洋興業とともに、金津熊夫に代表される田中丸商會を、新参者でありながら高く評価していることが見受けられる。<sup>13</sup>

さらに日本の手強い競争相手として、「創業十年比較的強固ナル根底ヲ有シ而モ敏活ナル」英国企業 *Burns Philp* 会社、また日本軍占領下で不利な状況にありながらも、「各島富有ナル土地ト手足ノ如クニ従事スル仲買人トヲ有シ抜クベカラサル勢力ヲ扶植アル資本金220万馬克」を誇るドイツ企業 *Yuni* 会社があることを指摘している。守備隊長は軍人らしからぬ経済見識を以て、次のように述べている。

茲ニ於テカ田中丸善藏ト南洋貿易會社トハ既ニ合同ノ機運熟セリトカ、南洋興業会社モ亦此ノ旗下ニ參集セサルヘカラザル運命ヲ有ス・資力アリ着實ニシテ有力ナル一會社ノ創立ヲ見ルヲ得ハ邦家ノ為メ処スヘキナリ・・・<sup>14</sup>

一方で次のような報告も第一特別根拠地隊長名で軍令部宛されている。

十月三十一日第十一乾坤丸（十一月・引用者）六日日邦丸入港日邦丸ハ穀類及雜貨ヲ輸入尚無斷各島ニ人員ヲ殘留セシメタリ渡来ノ商人ニ不信ノ言動多ク暴利ヲ貪リ土人怨嗟ノ声ヲ聞ク島政運用上多大ノ支障

ヲ来ス恐アリ<sup>15</sup>

いうまでもないが日邦丸は田中丸の傭船である。また別の史料には、サイパン島守備隊長の「佐世保の御用商人田中丸善藏が占領した島々に上陸しては『田中丸占有地』と書いた看板を立てていたので嚴重に注意した」との報告が存在することが明らかにされている。<sup>16</sup>こうした報告は、ヤルートにおける金津熊夫に代表される、田中丸善藏の誠実な商活動を際立たせるものとなっている。永年南洋で辛酸を嘗め、足場を築きあげてきた南洋貿易、南洋興業などの老舗企業に比べて、いわば戦時のどさくさに日邦丸を仕立ててやってきた田中丸一行は、いくら佐世保鎮守府御用であったとしても戦時下南洋各島の現地守備隊にしてみればいかにもうさんくさい存在と映ったことは想像に難くない。それにも関わらず、本稿で主に紹介したヤルート守備隊長立川少佐の軍令部宛報告に現れた田中丸善藏代理人金津熊夫と田中丸商店（田中丸合名会社）に対する冷静な評価は、興味深いものとなっている。金津は田中丸善藏の南洋貿易取締役社長就任後も蘭領東インドのセレベスへと派遣されるなど活発な活動振りが示唆されるものとなっている。金津をはじめとした社員その後の具体的な事業展開を明らかにすることが今後の課題である。

## 田中丸社長就任と南洋貿易の飛躍的拡大

南洋貿易株式会社は明治二六年、和歌山県の素封家三本六右衛門、船渡政助ら有志による組合事業として僅か八千円の資金をもとに南洋貿易事業を創始したことに始まる。その翌年の明治二七年資本金一万二千円の合資



會社として南洋貿易日置合資会社が發足（「日置」は三本らの出身が和歌山県日置村であることによる）、明治三二年には資本金一〇万円の南洋貿易日置株式會社となり、明治四一年には村山合名會社との合併により資本金一五万円に増資、日置の字をとり南洋貿易株式會社が誕生するにいたった。ドイツ政庁による圧迫や日露戦争の逆境を乗り越え、やがて「努力奮闘遂ニ大正二年末ノ決算ニ於テ參拾有餘萬圓ノ財産ヲ有スルニ至リ尚進ンデ事業ノ發展ヲ計」ることになったのである。<sup>17</sup>

南洋貿易株式會社は、大正二年当時英領ギルバート諸島方面への事業拡大を進めつつあったが、日独開戦により大きな転機を迎えることになる。ドイツ領南洋群島に日本海軍が上陸、軍政が敷かれ、従来ドイツ人の独占してきたマーシャル諸島の權益が日本人の手に入ることになったのである。そこで南洋貿易株式會社は、大正三年一二月、現資本金一五万円に加えて三五万円の増資を計画するにいたる。『南洋貿易五拾年史』は次のように記している。「増資額の參拾五萬圓は、三本社長が一人で引き受けても樂に出来るので、金は問題ではなかったが、人が問題であつた。本来社長の三本六右衛門は、當時紀州第一の富豪であつたし、初めから會社の實務には殆ど携はる所がなかった。・・・會社經營の任務は、専務の船渡政助が一人で背負つてゐた。それで船渡専務は會社の事業拡張は必然の勢ひであり、増資計画の案も出来たが、船渡と共に經營の衝に直接當つて呉れる人物が欲しかった。」

増資をして事業を拡張しても、人がいなければ、いかに有望な事業でも、それを現実化することは出来ない。こうしたなか、たまたま田中丸善蔵が現れたと『五拾年史』は記している。田中丸は群島の各地を視察して同年一月中旬に帰国、同年末善蔵は上京して船渡専務を訪問、南洋貿易會社

への出資と經營参加を申し出たという。<sup>18</sup>

これにより大正四年二月、増資計画に基づき田中丸が三五万円を出資、従来の資本金一五万と併せて南洋貿易の資本金は五〇万円となった。出資に伴い、田中丸善蔵は三四才の若さで取締役社長に就任した。翌大正五年にはさらに五〇万円を加えて資本金が一〇〇万円に増資された。

大正四年一〇月には海軍省の命により南洋定期航路が開設されることになる。大正五年一月一日、南洋貿易株式會社社長田中丸善蔵と海軍省經理局長との間に、横須賀と南洋群島間に於ける海軍用運送契約が月額四万二千円で締結された。これにより横須賀、横浜、門司、小笠原父島、サイパン、トラックを幹線として結び、トラック島とポナペ、クサイ、ヤルート、パラオ、アンガウルなどの南洋各島を支線として結ぶ海軍の受命による南洋定期航路の運行が海軍の命令航路として開始されることとなった。<sup>19</sup>

大正六年には三度目の増資で一躍三〇〇万円にまで増資が行われ、事業はさらに拡張されることになる。大正六年は田中丸の南洋貿易にとって事業拡大の画期となるものであった。セレベスのメナドに支店を開設、戦争特需に沸く中で世界的規模での船腹不足を受け、鳥羽の造船所を買収し自ら造船に乗り出したほか、田中丸南洋視察に傭船したかの日邦丸のほか新たに千トン級木造船三隻を購入する。また初代善蔵の四男（二代善蔵の弟）善八は八〇〇トンの南貿丸にコブラを満載して、サンフランシスコに直接貿易を試みている。<sup>20</sup> さらに同年一二月には南洋貿易商社の草分けのひとつであった恒信社の営業権すべてとその所有する補助帆船五隻を買収している。

一方、南洋貿易株式會社々内では、創業以来大正四年の増資まで同社の經營を担ってきた船渡政助取締役らが退任、新たに田中丸の南洋視察に同

行した佐藤適が取締役支配人に就任する。さらに南洋視察に際して大隈重信と田中丸との「わたりをつけた」佐賀出身の財界の後ろ盾、藤山雷太が相談役に迎えられている。まさに「田中丸カラー」を鮮明にした人事であった。

翌大正七年にはさらに所有帆船を増やすとともに、英蘭系バターフェ石油会社(B.P.M.)のボルネオ・バリクパパンにおける物資輸送契約を締結したほか、田中丸の日邦丸南洋視察に際してマーシャル諸島で大いに活躍した金津熊夫らをジャワに派遣、スラバヤの農園事業、石油事業などについて調査視察を行っている。またフィリピンの麻にも関心を持っていたようである。<sup>(21)</sup>

### 大戦終結後の南洋貿易会社と田中丸善蔵

しかしながら大正七年半ばにおけるドイツ西部戦線での大攻勢失敗、一月のドイツにおける一一月革命と休戦を受け、こうした好景気も終りを告げつつあった。翌八年六月のヴェルサイユ講和は、好景気のもと膨れ上がった海運業界の崩壊と商品市場の暴落を引き起こしたのである。この戦後恐慌により商社の倒産や契約破棄が頻発し、それまで相次ぐ増資と営業拡大を強気に行ってきた南洋貿易株式会社もその影響を免れることはできなかった。タイミングの悪いことに、休戦の成立する大正七年一月に同社は臨時株主総会を開き、資本金三〇〇万円を倍額の六〇〇万円に増資することを決議、直ちにそれを実行したことは田中丸善蔵にとって致命的なものになった。またセレベスのメナドを大阪に向けて大正七年七月二日に出港した南賀丸は行方不明となり、懸命の搜索も空しく翌八年二月、築地

本願寺で社葬を行い、四月には船籍を抹消されるにいたっている。<sup>(22)</sup>

戦後恐慌に加えて南賀丸喪失は同社に大きな損害を与え、増資から一年にも満たぬ大正八年九月には資本金四〇〇万円が減資されることになる。この責任をとり、田中丸善蔵は取締役社長を辞任、取締役に降格、間もなく同社から身をひくことになる。

だが、田中丸善蔵の次のような人物評はその短いながらもきわめて破格の南洋関与を三〇代にして成し遂げたことをみればまさにふさわしいものといえるであろう。

歐洲戰亂終息後に至り事業に一頓挫を來せしため已むなく同社の事業を斷念せしと雖も、氏は確かに南洋開拓の殊勲者たると同時に南洋貿易の先覺者として當時の活躍は大に推賞するに足るべし。<sup>(23)</sup>

南洋貿易株式会社から身を引いた田中丸善蔵は、以後佐世保をはじめ福岡、佐賀でのデパート事業に専念、恐慌を乗り越え昭和の時代とともに事業を大きく展開していったことは人々に知られるところである。一方その後の南洋貿易株式会社は大正一二年の関東大震災の打撃もあり厳しい経営を続け、相次ぐ役員交代と無配当を繰り返しながらも踏みとどまる。やがて昭和一四年には資本金一千万円に増資、農水産業、鉱業、海運造船などの多角化と南洋及び蘭領東インドを活動地域とした幅広い南方事業を展開する国策企業として存続する。そして昭和一七年には松江春次の南洋興発との合併を経て、太平洋戦争敗戦とともにその生命を終えることになる。一方玉屋は佐賀を代表するデパートメントストアとして現在も地元で親しまれる存在であり続けている。<sup>(24)</sup>

## おわりに

本稿では佐賀県牛津町出身の玉屋創業二代田中丸善蔵の、ミクロネシア、マーシャル諸島など当時「南洋群島」と呼ばれた南太平洋上に広がる南洋の島々とのかわりを紹介した。特に第一次大戦下危険を冒した日邦丸による南洋視察、ヤルトでの田中丸商店社員の活動ぶりは、田中丸のこれまで余り知られてこなかった一面であろう。さらには戦前における日本の南洋経済進出を担ってきた南洋貿易株式会社のきわめて短期間ながら驚異的な発展を田中丸善蔵がリードし、途中で夢破れたことは、南洋事業経営と、日本と南洋を結ぶ「南洋航路」の開拓者としての田中丸善蔵の名を近代日本の南洋関与の歴史の中に鮮明にとどめることになったといえよう。本稿を端緒として、筆者は今後、田中丸と南洋事業との関わりについて大隈重信、藤山雷太ら政財界佐賀人脈の存在を踏まえてさらに明らかにすることを目指している。さらに南洋貿易を退いて以降の田中丸商店の展開について考察することにより、近代日本・佐賀の南洋・南方関与の歴史を解明していきたいと考えている。<sup>(28)</sup>

- (1) 牛津町史編纂事務局編『牛津町史』一九九〇年 一〇三六頁
- (2) 『事業ト人 奮闘秘話 一』福岡時事社 一九二九年 一二二頁
- (3) 「第五特別陸戦隊戦時日誌(一)」公文備考 防衛庁防衛研究所 アジ歴 C10080130500
- (4) 外務省通商局『獨領南洋諸島事情』大正四年 九一―九三頁
- (5) 南洋協会南洋群島支部『日本の南洋群島』昭和一〇年 八三―八六頁
- (6) 「第一南遣支隊戦報(電報)(二)」『特別南遣艦隊戦報』海軍省公文備考 防衛省

防衛研究所 アジ歴 C10080154200

- (7) 「第五特別陸戦隊戦時日誌(一)」公文備考 防衛庁防衛研究所 アジ歴 C10080130500
- (8) 「第五特別陸戦隊戦時日誌(一)」公文備考 防衛庁防衛研究所 アジ歴 C10080130500
- (9) 「第五特別陸戦隊戦時日誌(一)」公文備考 防衛庁防衛研究所 アジ歴 C10080130500
- (10) また、日本海軍占領下のドイツ領南洋群島では、ドイツ法に基づき「営業ノ多寡ニヨリテハ六千馬克ノ営業税ヲ納付」することとされ、実際に外国人から守備隊長名で徴税を行ったとの記録がある。だが「田中丸善蔵ニ於テモ過渡ノ時期ニ於テ六千馬克ノ営業税到底耐ユル所ニ非ルヲ以テ第一南遣枝隊司令官カ日本商人ニ對シ當分ノ間輸出入税ヲ免セラレタル御趣旨ヲ體シ」営業税を免除したと報告されている。五特陸報第二「第五特別陸戦隊戦時日誌(二)」公文備考 防衛庁防衛研究所 アジ歴 C10080130500
- (11) 五特陸報第二「第五特別陸戦隊戦時日誌(二)」公文備考 防衛庁防衛研究所 アジ歴 C10080130500
- (12) 南洋興業は南洋貿易同様、主に紀州の富豪や事業家の援助を受けていたという。
- (13) 立川少佐は軍令部への報告の中でヤルト到着間もない田中丸の動向を寧ろ冷ややかに見ていた。たとえば商用スクーターを買い取ろうとした田中丸を、「種々手段ヲ画センモ遂ニ失敗ニ皈セリ」と記している。だが二週間の航海から再び寄港した金津の報告を詳細かつ好意的に記していることから金津に代表される田中丸商會を評価していることが見受けられる。
- (14) 五特陸報第二「第五特別陸戦隊戦時日誌(二)」公文備考 防衛庁防衛研究所 アジ歴 C10080130500
- (15) 第一南遣支隊戦報(電報)(五)「特別南遣艦隊戦報」公文備考 防衛庁防衛研究所 アジ歴 C10080154500
- (16) 平岡洋一「田中丸善蔵——南洋航路の開拓者——」『太平洋学会誌』第七二／七三号 一九九七年一月
- (17) 「南洋貿易株式會社増資趣意書」『南洋貿易五拾年史』南洋貿易株式会社 一九四二年 七八―七九頁
- (18) 「南洋貿易五拾年史」 八三―八四頁

- (19) だが翌大正六年九月三〇日を以て同社は命令航路受命を辞退、日本と南洋群島を結ぶ幹線の命令航路は日本郵船が継承することになった。以降南洋貿易株式会社は南洋群島と北米などを結ぶ航路開拓のほか、主に南洋群島内を結ぶ支線経営にあたり、以後も経営拡大に併せて船腹を増やし続けた。「臨時南洋群島防備隊民生例規」海軍省公文備考 日独戦書 防衛庁防衛研究所 アジ歴C10123582800
- (20) 『南洋貿易五拾年史』八六頁 『朝日新聞』一九一八年二月一三日  
『牛津町史』一〇三七頁
- (21) 『南洋貿易五拾年史』九〇頁、『中外商業新報』一九一八年一月二二日（神戸大学新聞記事文庫）
- (22) 「南賀丸、酒田丸、近島丸、大成丸」海軍省公文備考 卷三四 艦船一七 防衛研究所 アジ歴C08021313700
- (23) 『佐賀県の事業と人物』事業編 佐賀県の事業と人物社 一九二四年 二七頁
- (24) さらに初代善藏の四男で玉屋四代善八の蒐集した九州陶磁のコレクションは日本有数の貴重な田中丸コレクションとして現代に受け継がれている。
- (25) 大隈重信の南洋・インドに対する関心については同じく佐賀出身の「南洋」エキスパート副島八十六の事跡を通して明らかにした拙稿「副島八十六と近代日本・佐賀・アジア——大隈の日印協会の活動を中心に——」（佐賀大学・佐賀学創成プロジェクト編『佐賀学——佐賀の歴史・文化・環境』花乱社 二〇一一年 所収）を参照。